

第23回 メルロ・ポンティ『知覚の現象学』ゼミ

2024/2/1 大谷美緒

第1部 身体 I 客体としての身体と機械論的生理学

〔神経生理学そのものが因果的思惟を超出する〕

まず、下記の部分が生理学としての一旦の結論かなと思った。

同じ器官に属する興奮があい異なるのはそれが利用する物質的器具の違いによるよりも、むしろもろもろの要素的な刺激が相互におのずと組織しあう仕方によるのであり、この組織化こそ、知覚の水準におけるのと等しく感覚的「性質」の水準においても、決定的な要因をなすのである。[138]

私の以前のイメージと違うのはそれが「組織化」であるということ。一つの刺激が一つの器官により唯一一つの感覚を産むのではないということ。これは、とても自分の体を理解するのに総合的なものだと思った方が適切である感覚と一致する。

そして、

刺激の受容における有機体の機能は、ある興奮の形態をいわば「理解する」(concevoir「はらむ」)ことである。[139]

興奮はこれから惹起するであろう知覚に、興奮を類似せしめるところの、神経間を横断する諸機能によって、この興奮は捉えられ、組織し直される。[139]

「これはこのようなものだ」と感覚するということは、感覚させられているだけ(「相互外在的な諸部分からなる」ということはこういうことか)ではない。「はらむ」(孕む)という言葉にはびっくりしたが、自らそれを生じさせるということも考えないといけない。

そういえば、目隠しをして物を触るのと、見て触るのでは全然違う。何を感じるか予見しにくい中で触覚はなんというか、興奮しているように思い、そして見ている時と同じようには全く思えない。

〔幻像肢の現象、生理学的説明も心理学的説明も等しく不十分である〕

どちらも不十分である。そして、両方の考え方をミックスすればなんとかなるように思われるように進んでいくがそれは「空間のうちにある「生理的事実」といずこにも位置をもたない「心的事実」」[142]両方について話せる場所を見つけないといけないという話だ。

確かにそれは素人が思うようには安易にできないことが説明されるとわかる。そして、なぜその場所をみつけないといけないかという客観と主観というものの両方について語ろうとしていたメルロポンティの方向性をなんとか進んでいくために、幻像肢が手がかりとして登場していることがわかる。

〔「心的なもの」と「生理的なもの」との間の実存〕

少し難しく感じたが、まず「世界における(への)存在」というのは、

「世界における存在」、つまり客観的、生理的、即自

「世界への存在」、つまり主観的、心理的、対自

という二つの領域が共存する概念だということがわかってきた。そして、この概念、場所によっての主観・客観の共存の可能性を期待している。

そして、なぜ反射がとりあげられているのか。

まず、意識は反射の過程と結果に参加はしない。そして「反射は対象の各点から発する刺激を待たずに、遠くからの対象の構造を素描する。」[145]。これには結構びっくりした。

反射は「状況のこの全体的な現前」[145]だという。一対一対応の刺激への反応ではなく状況を描き出した結果であり、逆に反射の方が刺激を指し示すという。

「状況の意味に向かって自己を開く作用としての反射」[145]という言葉はなんとなく異様というかあまり聞かないけれど、状況を自分に知らせることが反射として起これば、自分はその状況に立ち向かい始める。なんとなく、この事実をメルロポンティはポジティブに捉えているように思う。

そしてこの反射(とここでいう知覚)は『「世界における(への)存在」とわれわれが呼ぶところの先客観的な展望の様相』[145]なのだそう。先客観的とは客観的の前に、先にあるということだろう。以下の文章が具体的な説明だろうが今のところよくはわかっていない。

刺激と感覚的内容の手前に一種の内的隔壁があって、刺激や感覚的ないようよりもこれの方が遙に、反射や知覚が世界のなかでめざしうるものの範囲を、つまりわれわれの可能的な行為の領域と生の幅とを決定しているということを認めなくてはならない。[146]